



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日语专业毕业论文 写作指导

庄凤英 主编

[日]松下和幸 [日]松下佐智子 著

 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS
www.sflep.com



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日语专业毕业论文 写作指导

庄凤英 主编

[日] 松下和幸 [日] 松下佐智子 著

 上海外语教育出版社

外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

www.sflep.com

图书在版编目(CIP)数据

日语专业毕业论文写作指导 / (日)松下和幸, (日)松下佐智子著.

-上海:上海外语教育出版社, 2017

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

ISBN 978-7-5446-4874-5

I. ①日… II. ①松… ②松… III. ①日语-毕业论文-写作-高等学校-教材

IV. ①G642.477 ②H369.36

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第058542号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 曹 艺

印 刷: 上海华教印务有限公司

开 本: 787×1092 1/16 印张 14 字数 306 千字

版 次: 2017年7月第1版 2017年7月第1次印刷

印 数: 2 500 册

书 号: ISBN 978-7-5446-4874-5 / H · 2155

定 价: 37.00 元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

总序

21世纪是一个国际化的高科技时代，也是一个由工业社会进一步向信息社会转化的时代。科学技术的高速发展、新兴交叉学科的涌现、人文文化与科学技术间的相互渗透和融合、社会的信息化以及知识、信息传播技术的日新月异加强了世界各国文化的交流、碰撞与合作。要想在激烈的世界竞争中立于不败之地，就要占领人才培养的制高点，培养出世界一流的高素质、高水平人才。

由于社会对外语人才的需求已呈多元化趋势，以往那种单一外语专业的基础技能型人才受到挑战。今后我们仍然需要培养《源氏物语》的专门研究家，但是高校外语专业的教学必须从过去的“经院式”人才培养模式向宽口径、应用性、复合型人才培养模式转化。社会要的不光是懂外语的毕业生，还需要思维敏捷、心理健康、知识广博、综合能力强的精通外语的专门人才。

我国的外语教学界已充分认识到，对国家建设发展急需的外语专业人才加大培养力度，提高其能力和素质是一项迫在眉睫的任务。随着我国日语专业教学点设置的不断增加和招生规模的逐年扩大，日语专业本科生的教学改革、学科建设及教材出版亦取得很大的成绩，各地先后出版了一批在全国有影响的优秀教材。正因为社会对日语人才的培养提出了更高的标准，同时对日语学科的建设也提出了新的要求，因此，日语本科生教材的编写和出版也应该顺应潮流，开拓创新。

我国外语教材和图书出版的基地、领头羊之一的上海外语教育出版社（外教社）以高度的责任感和高瞻远瞩的视野，在充分调研的基础上，抓住机遇，于2003年8月邀请了全国主要外语院校和教育部重点综合大学日语专业的近20位专家，在上海召开了“全国高等学校日语专业本科生系列教材编写委员会会议”。代表们完全认同编写“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的必要性、可行性及紧迫性，并对编写立意、教材构建、编写审校程序提出了许多积极、中肯的建议和要求。之后，外教社又多次召开全国及上海地区专家学者会议，分头撰写编写大纲，确定教材类别、项目，讨论审核样稿。经过两年多的努力，终于迎来了第一批书稿的付梓。

本套教材共分语言知识、语言技能、语言学与文学、语言学与文化、

语言学与翻译（中日对译）、人文科学、经济贸易、测试与教学法等若干板块，可以说几乎涵盖了当前我国日语专业所开设的全部课程。编写内容根据因材施教的原则，深入浅出，反映各个学科领域的最新研究成果；编写体例采用国家最新有关标准，力求科学、严谨；编写思想贯彻了在帮助学生打下扎实的语言基本功的基础上，培养学生分析和解决问题能力的原则，全面提高学生的人文、科学素养，养成健康向上的人生观，成为合格的外语专门人才。

本套教材编写委员会云集了我国日语界学者专家，其中不少是高等学校外语专业指导委员会的委员。每一种教材均由编写委员会的专家们仔细审阅后确定，有的是从数种候选教材中遴选，总体上代表了中国日语教材学发展的方向和水平。我们相信，外教社这套“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的编写和出版，一定会促进我国日语专业本科生教学质量的稳步提高，其前瞻性、先进性和创新性也将为日语教材的编写拓展更为广阔的视野。

谭晶华

上海外国语大学常务副校长

作者的话

论文写作是一项艰苦的脑力劳动，写作犹如艺术创作，也需要坚韧不拔的耐力和卓越的创造力。

无论是本科毕业论文还是硕士论文，实际写作时，选择什么主题比较合适？如何写作比较好？从绪论到各个章节以及末章应该写什么、如何写？应该如何查询整理资料？写作时需要哪些恰当的表达方式？诸如此类的问题比比皆是。

身为日本人的我和太太都在澳大利亚国立大学（Australian National University）用英语完成了硕士论文和博士论文，这真是一项十分艰辛的工作。尤其是在选择表达方式上吃了不少苦头。平时我们认为理所当然的日语逻辑思维用到英语上却是错的。当时，澳大利亚国立大学的导师 Gail Craswell 博士多次指出：你们这是日本人和日语的逻辑，用在英语中是行不通的，这句话用英语应该这么说……

那时候我就想：如果能有本合适的论文写作指南就好了。我读了很多有关写作方面的书，但是仍然没有找到适合我们的。有些理工科的写作书，只是在讲逻辑，对于研究语言学的我和研究《源氏物语》的太太来说没有什么帮助。我想知道的是诸如该写什么、该以怎样的逻辑展开论述、该使用怎样的表达方式、各章的表达方式如何设定、内容应如何组织等。我认为如果能有回答这些问题的写作指南就可以写好论文，但可惜的是当时没有找到合适的书。将要完成博士论文的时候，Gail 博士出版了《Writing for Academic Success - a postgraduate guide-》这本书。我要是能早点读到这本书就好了。与 Gail 博士的沟通令我们受益匪浅。

从那时开始，我们就一直想总结出一套不仅限于日本或某一国家，而是全世界通用的论文写作方法。

我在中国从事日语的教学，接触到了学生的毕业论文。可学生的作品大多与我们心目中的学术论文相差甚远，这更坚定了我们要编写出世界通用的论文写作方法的决心。有幸的是，学校请我们担任“学术论文写作”课程的教学。在教学的过程中，我们以写作博士论文时的切身经验为基础，一边备课，一边将教案编写成教材。书中介绍的摘要、绪论、正文以及结

论的写作方法或许和中国现有的标准有所不同。但是，我想告诉大家：这些写作方法正是今后学术写作的主流发展趋势。

指导思想如下：

1. 本教材指明了论文写作中应包含的内容。明确了绪论、各章、结论、摘要以及附录写什么，如何写。

2. 论文提出问题，经过论证，得出结论，全文必须贯彻逻辑性。

3. 本教材强调：研究工作需要主动的、积极的态度。被动的人无法完成创造性的工作。抱着什么都要老师来教的心态是写不成论文的，必须要化被动为主动，做不到这一点的人将始终停留在写“读后感”的层次。

4. 无论是日语学习者，还是日语母语者，在论文写作中都要用到一些必要的表达方式。为了帮助论文写作者，本教材浅显易懂地编选出了论文写作所需要的表达方式。在日语词汇层面也是这样。例如，在使用动词时，我们常常会犹豫，不知道应该使用哪个动词更合适，对此本教材给出了“学术词汇”供参考。

5. 为了能让写作者理解并顺利完成论文，应广大师生要求，本教材列举了大量论文实例。

6. 本教材在编写过程得到了同事和朋友的批评指正，力争涵盖论文写作指导所需要的必备要素。

最后，对于北京语言大学以及北京科技大学让我们担任了“作文”、“学术论文写作”的课程，在此再一次表示感谢。书中引用了课堂上以及论文指导中一些学生的文章，对同学们和毕业生表示感谢。另外，本教材得到了“北京科技大学教材建设项目”的资助，在此表示感谢。

本教材如能助您一臂之力，我们将感到不胜荣幸。

松下 和幸
松下 佐智子

はじめに

論文を書くには大変な知的作業を伴います。書くという能動性は芸術を生み出すものに匹敵するほどのエネルギーと大切な創造力が要求されます。

卒論にせよ、修士論文にせよ、実際に書くとなると、何をテーマに選んだらいいのか、どのように書いたらいいのか、序論から各章、終章に至るまで何をどのように書いたらいいのか、どのように調べたらいいのか、どういう表現形式が必要となるのか、わからないことだらけのことが多いと思われます。

日本人の私と妻がオーストラリア国立大学 Australian National University で修士論文、博士論文を英語で書くのに非常に苦労したのは、このことでした。特に、どんな表現形式で示せばいいのか、に悩まされました。さらに、当たり前だと考えていた日本語のロジックと英語のロジックとの違いでした。その時に、オーストラリア国立大学の先生である Gail Craswell 博士が、この箇所のロジックは日本人や日本語のロジックなので通じない、この場合、英語ではこう表現するのだということ度々指摘してくださいました。

そうしたときに考えたのは、論文の書き方の指針があれば書けるということでした。何冊もライティングの本を読みましたが、それでもすっきりしたものが探せませんでした。理系のライティングの本はありましたが、単純なロジックばかりで、言語学を専門とした私にも源氏物語を専門としてきた妻にも求めていたアドバイスが載っていませんでした。私が知りたかったのは、何を書くのか、どういうロジックで展開すべきなのか、どんな表現形式を使うのか、各章の表現のしかたはどのようにすればいいのか、さらに、論文の内容はどうすればいいものになるのか、ということでした。こうした要求に応えてくれる指針があれば論文が書けると思いましたが、残念ながらいい本は見つかりませんでした。博士論文を書き終える頃に、Gail 先生が『Writing for Academic Success -a postgraduate guide-』の本を出版しました。もう少し早く読みたかったと思いました。私たちをいつも納得させてくれたのが、オーストラリア国立大学の先生 Dr. Gail Craswell とのやりとりでした。

その時以来、日本だけに通用する、ある国にだけ通用する、という論文の書き方でなく、世界に通用する論文の書き方をまとめたいと考えようになりました。

中国で日本語教育の教師として卒業論文に関係するようになり、私の考えるアカデミックな論文とはほど遠い学生の作品ばかりを見せられ、世界に通用する論文の書き方が必要だという思いは増すばかりでした。幸いにも、授業で「論文の書き方（学术论文写作）」を担当するよう要請されました。そのおかげで、授業を準備しながら、論文の書き方をテキストにまとめることができました。そこには私たちが博士論文を書く上で苦勞した体験が土台にあります。したがって、要旨の書き方、序論（イントロダクション）の書き方、本論の書き方、結論（コンクルージョン）の書き方は、従来中国で指針となっていたものと異なるかもしれません。しかし、こうした書き方こそが今そして今後の流れであり、向かうべき書き方であることを知っていたいただきたいと願っています。

基本的な考え方は次の通りです。

論文で書くべき内容を整理しました。ですから、序論であれ、各章であれ、結論であれ、要旨であれ、付録であれ、何を書かなければならないのか、迷うことはないと思います。

論文とは“問い”と“答え”で成り立つものであり、その間を論証するという知的論理性が必要であることが一貫して書かれています。

何よりも、能動的に、積極的に取り組む姿勢が研究には必要であることを強調しています。受け身では、創造的な仕事はできません。なんでも先生に教えてもらうという姿勢では論文は書けません。受け身から能動へ切り替えなければなりません。これができない人はレポートの域を出られないと思います。

論文に取り組む人のために、外国語として日本語を学んできた人にとっても、日本語の母語話者であっても、必要不可欠である表現形式を理解しやすく示しました。日本語の語彙のレベルでも、例えば、動詞にしてもどの動詞を使うのが適切なのかも知らなくてはなりません。本書はそのアカデミックな表現を示してあります。

誰でも理解でき、誰もが論文に向かって進めるように、例文を多く示し、実際にどう書くのかを示してほしいという学生や先生方の声に応えたつもりです。

同僚や友人たちから批評を頂戴しながら、原稿を完成したので、基本的なことはほぼ漏らすことのないよう心がけました。

北京語言大学、及び、北京科技大学で私たちが働いている時、「作文」や「論文の書き方」の授業を担当させていただいたことを改めて御礼申し上げます。また、授業や「卒論指導」で関係した学生の文章を活用させていただいたことを学生や卒業生の人たちにお礼を申し上げます。

本書を読んで、卒業論文、及び、修士論文を書くお手伝いのできたのであればこれにまさる喜びはありません。

松下 和幸
松下 佐智子

目次

第一部 論文に必要な基礎知識

1. 論文に何が必要か	3
2. 論文の完成までに何をすればいいのか	14
3. テーマの選定へ	22
4. 資料に関する基礎知識	27
5. 卒論全体の構成要素	36
6. 研究の取り組み方の例	41

第二部 論文の構成と内容

1. 序論(イントロダクション)とは何か	57
2. 第2章以降の内容	68
3. 結論(コンクルージョン)の内容	70
4. タイトルのつけ方	74
5. 引用文献	80
6. 要旨の内容	84

第三部 論文の表現方法と表現形式

1. トピックセンテンスの表現	101
2. 引用の表現	110
3. 要約の表現	117
4. イントロダクションの表現	122
5. 第2章以降の表現	133
6. コンクルージョンの表現	138

第四部 論文の表現上のスキル

1. 論文を書く上で知らなければならない技術 スキルその一 〈表記〉	143
---	-----

2. 論文を書く上で知らなければならない技術 スキルその二 ＜文章表現の基礎＞	149
3. 論文を書く上で知らなければならない技術 スキルその三 ＜論理用語と表現形式＞	156
4. 論文を書く上で知らなければならない技術 スキルその四 ＜気をつけるべき論文体＞	163

第五部 より良いものを目指して

1. いい論文・良くない論文	169
2. リサーチ・プロポーザル(研究計画書)の書き方	174

付 録

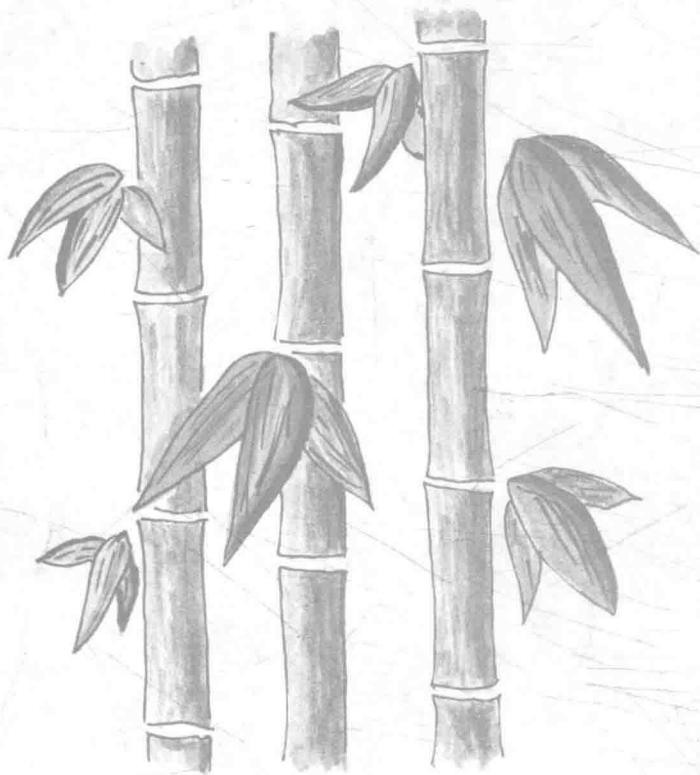
1. 個別指導用の取り組み用紙	193
2. 本科生卒業論文規定及び格式規範の例	195
3. 問題の解答	199
4. 参考文献	210



第一部

論文に必要な 基礎知識

1. 論文に何が必要か
2. 論文完成までに何をどうすればいい
のか
3. テーマの選定へ
4. 資料に関する基礎知識
5. 卒論全体の構成要素
6. 研究の取り組み方の例





論文に何が必要か

1 論文と作文とはどこが違うか

文章を書く場合に、様々な分野や書き方があります。エッセイを書く、日記を書く、手紙を書く、メールを書く、新聞記事を書く、新聞の投書欄に書く、学校に提出のレポートを書く、実験の報告書を書く、社内での報告書を書く、提案書を書く、というように目的に見合ったそれにふさわしい文体（だ体、ですます体、である体）、表現形式、内容が求められます。

論文を書くとは、問題についてある問いを発し、議論し、主張し、証拠を示し、分析し、判断し、問いに対する答えを示すことです。論文には客観的な、論理性と証拠が必要です。これ抜きに説得力はないと言えます。したがって、論理的であることがはじめから終わりまで貫かれていなければなりません。途中で矛盾があったり、書いているプロセスに曖昧さがあったりしてはなりません。あくまでも、冷静に明快に書き進めなければなりません。

一方、作文の目的は、情景や印象や体験などを描写し、自分の感想や意見や考えを述べることです。作文には主観性、感性、情緒が受け入れられます。常にロジックを考えずとも表現できると言えます。

さて、ここでは、大学の卒業論文に焦点を当てて、どう考えどう表現するかを中心に扱います。この論文の書き方は修士論文、博士論文にも使える内容になっています。基礎はいずれも同じであるからです。

まず、一般の作文と論文とはどう違うのでしょうか。文体は作文の場合には、「だ体」「ですます体」「である体」のいずれも使いますが、論文は「である体」でなければなりません。慣習になっているアカデミックな文体と言えます。表現形式はアカデミックなものでなければなりません。縮約語を含めた話し言葉特有の表現やスラングを使ってはいけません。語彙もアカデミックなものが必要になります。これらは後で順に説明します。作文と論文とを比べた時、内容で最も違うことは何でしょうか。それはテーマに関係しています。

(1) 作文にも論文にも“テーマ”がある

ものを書く場合にテーマ（主題）があります。小説では「テーマは何か」が問題になります。芥川の小説「羅生門」ではテーマは「人間が生きることについてだ」ということでは漠然としていて何がテーマであるのかよくわかりません。テーマを、「生きるためには、自分の考えをしっかりとって餓死することになっても自分が大切だと考えている方向へ進むべきなのか、それとも生きるためには悪事を働いてもしぶとく生きぬいて行くべきなのか」と捉えるならば、これがテーマなのかということが読み手にわかります。言い換えると「極限状況に置かれた時に、人はどう生きるべきなのか」がテーマになっているという言い方もできます。読み手がこれをテーマだと認識してくれるのは、“問い”が明確になっているからです。“問い”がなければテーマとは言えません。小説ではテーマは隠れています。一般の作文の場合では、テーマが隠れている場合もあれば、明示されている場合もあります。論文の場合には、このテーマを読み手にはっきりと示さなければなりません。「この論文のテーマは……である」と読み手に伝わるようになっていなければなりません。これが他の作文と大きく異なる重要なポイントです。

以上をまとめると次のようになります。

1. 「テーマ」と「問い」の関係は？

⇒“問い”がなければ、論文の“テーマ”とはいえない。

2. 作文には“問い”も“テーマ”も表面には現れず、隠れていても構わない。しかし、論文の場合には“テーマ”が必ず明示されていなくてはならない。

3. したがって、テーマ(主題)としての“問い”が明示されていなければ、論文とは言えない。

(2) 問題の場(分野・領域)とテーマの違い

「どんなテーマで卒論を書くのですか？」と尋ねると「教育関係です」「近代小説です」「金融市場です」「日本語の文法です」という返事を耳にします。こういう答え方は何を示しているのでしょうか。それは研究の分野・領域を示しています。テーマを示しているわけではありません。一般的に「テーマ」という語の使い方はとても大雑把です。上のように領域の意味で使われたり、タイトルの同義語として使われたりしています。しかし、本来は研究の基調となる考えのことです。題目と言い換えても本来の意味からズレています。何を追究しているのかがテーマの本来の意味です。重ねて強調しますが、テーマには“問い”がなければなりません。

「問題の場」と「テーマ」との違いを見て行くことにします。次のAとBとを見てください。

- A. (1) “近代におけるアジアの苦しみについて”
(2) “中国の経済成長について”
(3) “日本のふるさとの新しさについて”
(4) “日本文化の功罪について”
(5) “日本語教育の発展について”
- B. (1) “どうしてアジアは帝国主義の餌食となったのか”
(2) “中国と日本の文化における共通項は何か”
(3) “学校で学ぶ英語は何年勉強してもなぜ話せるようにならないのか”
(4) “戦後急速に日本経済が発展したのはどうしてか”
(5) “日本の平和憲法が世界に広がらない理由”

上のAは(1)～(5)まで、いずれも研究の“場”すなわち“問題の場”を示しています¹。どれも具体的な部分に触れそうにはなっているけれども、まだまだ分野・領域にとどまっています。例えば、「中国について」「日本社会について」「日本文化について」「日本語教育について」とするなら、それは分野そのものを示しており、何を研究するのか、不明瞭です。それよりも、Aの(1)から(5)までは一歩進んでいます、ままだ曖昧模糊としています。なぜなら、“問い”がまったく見えないからです。これではテーマになっていません。それに対して、Bはどうでしょうか。

Bの(1)にはアジアは帝国主義の餌食となったという認識を示し、その原因を探ろうとしていることがわかります。ここには“問い”があります。

(2)については中国に行った人も日本に行った人も互いに違う点ばかりに目が行ってしまいがちです。しかし、共通項がある。それは何か、という“問い”があります。

(3)日本では中学及び高校と6年間英語を勉強しても、一般的には会話がまったくできませんでした。他の国では6年勉強すれば話せるのが当たり前だと考える人が多くいます。しかし、残念なことに、日本人は話せません。特別に会話を学んだ人だけが話せます。それはどうしてなのか、という“問い”が明瞭に示されています。

(4)戦後の日本経済の急速な発展は、アジアとりわけ中国ではしばしば耳にしてきた話題です。戦後の立ち直りが奇跡的なのかどうか、どうしてそんなに早く立ち直ったのか、という“問い”がここにあります。

(5)もよくある疑問です。戦争しない、武力で解決しないと世界に発信し

1 澤田昭夫(1977:246-252)が「問題の場」という語を使っています。本稿はこれを適切な用語として踏襲しています。